

武蔵野文学館 五年のあゆみ

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000353

武蔵野文学館 五年のあゆみ

藤井 真理子

はじめに

早いもので、二〇一八年に武蔵野文学館が開館してから今年で五周年を迎えた。当館は、本学で教鞭をとった故・秋山駿氏、その妻法子氏から、故人の蔵書と共に寄付されたものを基金として開設された文学館である。紆余曲折があり、武蔵野大学武蔵野キャンパス、紅雲台一階奥の部屋をリノベーションして建てられた。工学部の水谷俊博教授により設計された〈空間と文学それぞれを介して、外へと広がりつながる場〉である。

開館から五年の間には様々な事があったが、年月と共にいつ何をしたかが曖昧になりがちである。簡単にではあるが、五周年を記念して、ここに武蔵野文学館が開館してから五年間の記録を残しておきたいと思う。

◆二〇一八年度

・四月二十二日 「むさし野文学館竣工を祝う会」開催

↓竣工を祝う会は、記念シンポジウム、内覧会・懇親会の二部制で実施された

↓開館に当たっては、当時の館長であった三田誠広教授から設立の経緯の説明

↓記念シンポジウム〈建築×文学〉第一部は、高木彬氏（当時龍谷大学）の研究発表、名木橋忠大氏（当時中央大学）による講演、第二部は先の二名に黒井千次氏（小説家・元武蔵野女子大学客員教授）、水谷俊博教授（工学部、むさし野文学館設計者）が加わり、シンポジウムが開催された。司会は山路敦史

氏（文学部助教、当時は北海道大学院生）が担当した

・十一月十一日 黒井千次氏映画『たまらん坂』（小谷忠典監督）試写会開催（中央区銀座TCC試写室）

・十二月二十二日 「ワクワクことばのひみつきち」in

むさし野文学館」開催

↓むさし野文学館完成を祝し、武蔵野キャンパス紅雲台を利用した、文学部を中心とする有志団体による子供向けブック・イベントを開催（代表 知念美里・山口杏菜）

↓親子連れ百二十七名が参加

↓入場料と募金の計一万四四五四円をNPO法人児童虐待防止全国ネットワークに寄付した

・一月三十一日（二〇一九年）「能と土岐善麿「青衣の女人」を観る」（喜多能楽堂）開催

↓階段壁面と二階スペースを利用し、土岐善麿の新作能・校歌展示も併せて開催

↓新作能の展示は岩城賢太郎准教授が担当、校歌展示には、卒業生から藤井真理子・丹治麻里子・井上悠が参加した

・二月二十八日（二〇一九年）映画『たまらん坂』完成披露試写会開催（新宿武蔵野館）

・三月三十日（二〇一九年）「むさし野文学館 館報 創刊準備号」発行

「むさし野文学館竣工を祝う会」の企画・運営には土屋忍教授（文学部、現・武蔵野文学館長）、中島しの、小亀舞、深澤茜（当時本学職員）が担当した。

「能と土岐善麿」は、文化庁劇場・音楽堂等活性化事業として二〇一六～二〇二〇年まで開催された。（主催・公益財

団法人十四世六平太記念財団、共催・武蔵野大学文学部）

二〇一八年四月に完成した「むさし野文学館」だが、現在と違い、当初はその利用受入れは学内の教育研究に限定しており、一般学生向けの開放はされていなかった。

◆二〇一九年度

・七月 映画『たまらん坂』がマルセイユ国際映画祭にてワールドプレミア上映

・十二月二十三日 文学館イベント「文学×音楽 音楽ライブ」開催

・十二月二十四日 むさし野文学館サイトプレオープン

・二月十八日（二〇二〇年）「能と土岐善麿「秀衡」を観る」（喜多能楽堂）開催

↓階段壁面と二階スペースを利用し、土岐善麿の新作能・校歌展示も併せて開催

二〇一九年度に入り、月・水の十～十五時で、学内向けに一般開放、予約制で外部に向けた開館を開始。当時の受付には、映画『ウエスト・トウキョウ・ストーリー』主演の菊池由希子、映画『たまらん坂』主演の渡邊雛子がいた。

開館と並行して、秋山駿氏の妻であり装幀家であった秋山法子氏の、「装幀目録作成」の作業を行う。

そして世界中で猛威を奮った、新型コロナウイルスが日本に到来し始めたのも、二〇二〇年であった。

◆二〇二〇年度

- ・五月 「むさし野文学館」Webサイト開設
- ・十月一日 「むさし野文学館」グッド・デザイン賞を受賞

二〇二〇年三月に「秋山法子装幀目録」は完成、同年五月、新しく開設された「むさし野文学館Webサイト」に掲載された。

二〇二〇年の四月は日本においても「緊急事態宣言」が発令され、活動は主に自宅で出来る作業にならざるを得なかった。

文学館の開館は、キャンパスに学生がいなくてもあり、予約時のみ開館に切り替えられた。この時期に入学した学部生は、一・二年の授業の大半をオンラインで受講、大学キャンパスに登校するようになったのは三年生になってから、という者が大半であった。

十月頃より、武蔵野大学小平寮一階「大河内文庫」の目録作成を開始。作業は、藤井真理子（武蔵文学館客員研究員）、加地花百（大学院生）、途中から小島直也（卒業生）

が担当した（二〇二二年四月頃まで作業、目録完成）

※「大河内文庫」とは、元武蔵野女子大学学長であった故・大河内昭爾氏から寄贈された蔵書（二万三九〇〇件）のこと

◆二〇二一年度

- ・十二月一日 映画『たまらん坂』がセント・アンドルーズ映画祭で最優秀撮影賞を受賞
- ・十二月二日 大河内家を訪問

大河内家訪問時に、大河内昭爾氏の元・秘書の斧田さんから、妻であるわかさんからお話を伺う。またその際、大河内家から、記事等のスクラップと写真類をお預かりする。

二〇二〇年二月～二〇二二年六月迄は、新型コロナウイルスの影響により、予約時のみ開館する状態が続く。

◆二〇二二年度

- ・四～七月 「大河内資料」の目録作成、文学館内の整理、開館再開に向けた準備を行う
- ・四月～ むさし野文学館HP、蔵書検索の登録用の作業を学部生四名に依頼するようになる（文学部・竹内祐紀、柳澤佳乃、野田真友子、村井紗弥）
- ・七月 むさし野文学館開館を再開

- ・八月二十日 オープンキャンパスで百十八名が来館
- ・九月 夏休み明けから本格的に開館を再開（月・水・金十～十七時）

・小企画展示「秋山駿」展開催（会期 二〇二二年十月三十一日（月）～二〇二三年一月二十四日（火））

・十月八～九日 摩耶祭にて、見学希望者の受け入れ

・十一月「むさし野文学館」のInstagram・Twitter（現・X）の再稼働開始

・十二月『緊急文学宣言 ―むさしの学生小説コンクール作品集』新潮社（武蔵野文学館編）発行

・三月（二〇二三年）「武蔵野に酔う」発行（四月からの企画展示「武蔵野にまた迷う」のフライヤー）

武蔵野キャンパスにも学生が戻り、七月より試験的に開館を再開。受付は、藤井、小島、新しく入った黒澤雄大（卒業生）が交代で担当した。

また、紅雲台一階ホールの活用方法を検討、文学館で昔作成したパネルを利用した、小企画展示「秋山駿」展を開催した。

並行して、二〇二二年十二月頃より、来年度に向けた企画展示とそれに伴う宣伝活動の企画・準備を始める。展示のフライヤー「武蔵野に酔う」の作成にあたり、学部生三名（文学部の森貞茜、伊藤遙香、大石歩果）が参加。

また、様々な人による発表の場としてのWebサイト「武蔵野歳時記」が完成。学生により、不定期更新される。

◆二〇二三年度

・四月 Webサイト「武蔵野歳時記」が開設

・企画展示「武蔵野にまた迷う」を開催（会期 四月十七日（月）～八月四日（金））（紅雲台一階）

↓延べ、百名以上が観覧

・四月十九日 水谷俊博教授が日本建築学会賞を受賞

・六月十八日 オープンキャンパスで百三名が来館

・七月 初めて新規スタッフ募集を公募にて行う

・八月十九日 オープンキャンパスで二百名が来館

↓併せて武蔵野キャンパス内で大学発のラジオ「イドバタコウギ」公開収録が行われ、ゲストに文学部町田康特任教授が出演。文学館でも紅雲台一階にて、

町田康コーナーを特設した

・九月九日 「水谷先生祝賀会兼むさし野文学館五周年を祝う会」開催（紅雲台一階）

・企画展示「土岐善磨展 ―武蔵野に始まり、武蔵野に終わる―」開催（会期 九月二十五日（月）～一月二十四日（水））（紅雲台一階）

・十月七〜八日 むさし野文学館として、初めて摩耶祭に参加（紅雲台一階）

↓古本市を開催。覆面本、文庫ガチャ、ブックカバー・

菓の販売等を行う

↓本に関しては、一冊を残して完売

↓二日間で約四〜五百名が来館した

・十二月 新規スタッフ募集再開

新年度になり開館を維持する為、四月から木村陽香（大学院生）が受付に入るようになる。また、オープンキャンパスの手伝いから始まり、夏頃より学部生二名（文学部の内田恵美莉・小瀬ゆかり）が文学館の活動に参加するようになった。

摩耶祭への参加とその準備の為、初めて新規スタッフ募集を公募で行う。工学部から横山隼汰、経営学部から福本わかばの採用が決まる。

十二月、今年度で卒業する四年生が多数いる為、人員補充の為再度スタッフ募集を行い、学部生三名（文学部の野田愛、石原愛美、萩原天音）の採用が決まる。

初めて、武蔵野文学館の総来館者数が千名を超える。

◆振り返りと、今後に向けて

私が武蔵野文学館の仕事に携わるようになったのは、

二〇〇九年の夏頃だったと記憶している。現在は無くなった「武蔵野校舎」にあった「武蔵野文学館準備室」という場所、月に一度集まり報告会を行っていた。「秋山駿」「黒井千次」「土岐善麿」という、武蔵野女子大学で教壇に立った三名を中心に、チームごとに分かれて、各先生方の業績を調査する活動を行っていた。著作目録と著者年譜の作成から地道に始め、雑誌記事や書誌情報の確認の為、国会図書館を始めとして各所に足を運んだ。

この三名の中でも「土岐善麿」を担当することになったのは、偶然である。学生時代の友人だった深澤希望さんが先にいたこと、他チームと比べて人が少なかつたこと等が理由である。勉強不足で恥ずかしい事だが、武蔵野大学の大学院を卒業したにも関わらず、私はこの時まで土岐善麿を知らなかつた。

あれから十五年経つ。あの時深く考えずに土岐善麿チームを選択した私は、十五年後も自分が土岐善麿の研究を続けているとは思ひもよらなかつた。二度の出産を挟んでいる為、絶え間なく研究を続けていた訳ではないが、こんなに長く続けることになるとは思わなかつた。偶然が重なった出会いだったが、土岐善麿という豊かな教養と好奇心を持ち、生涯を「文学に遊んだ」人物に出会えたことは、私の人生にとって大きな喜びであった。

また、二〇二一年七月に開館を再開してから、様々な方

達との出会いがあった。評論家・秋山駿に興味を持った男性、母校の校歌作詞が土岐善麿だったので興味を持ったという女子中学生や地域住民の方。足立区から土岐善麿の校歌を調べに、小学生の男の子がご両親と来館したこともあった。他に「文学館」が好きで来てみたという方、様々である。

学内においては、「開いていたので来てみました！」という学生や教職員の方も多く、武蔵野文学館の開館時間について周知の不足を痛感する一方で、定期的に開館していることで、その存在を認知する方が学内外で増えて行っている事を実感している。

本稿は、武蔵野文学館が二〇一八年に開館してから五年の記録である。だが実は、武蔵野文学館は、場所を得て形になるまで十年以上の歳月を要した事も併せて記録しておきたい。水谷教授の設計により、来館した方々に「素敵な場所」だと口々に褒めて頂けるような場所を得られた事は純粹に喜ばしい。一方で、私にとって「武蔵野文学館」とは「場所」や「物」ではなく「人」である。

予算もほぼ付かない初期の頃、何か出来ることは無いのかと、諦めずに行動し模索し続けた歴代の文学館スタッフがあり、細いながらもその活動が途切れず繋がっていった事、その積み重ねこそが「武蔵野文学館」を創ったのだと思っている。表向きには「開館五周年」だが、その前に十

年以上に渡る積み重ねがあったことを、改めて記しておくたい。

学部生・院生・卒業生・教職員と、色々な立場の方の尽力があり、現在がある。

それは今後もそうだと考えている。現在活動している文学館スタッフが持つ、興味と好奇心、文学と研究への熱意が、文学館を形作るのだと信じている。

また、個人としては開館五周年という記念すべき年に「土岐善麿展」を開催できた事はとても喜ばしかった。土岐善麿の業績は多岐に渡り、まだやれる事は多く残っている。生涯を「文学に遊んだ」土岐善麿に負けぬよう、今後も研究を続け、文学に遊び生きていきたいと思っている。